

## 葦名盛氏と医師糟尾宗頤

### (1) はじめに

戦国時代末期、葦名盛氏の時代は葦名氏の最盛期であった。天文 21 年(1552) 下野国から糟尾宗印・宗頤(父子か)という医師がやって来た。この医師は越後を目指していたが、伊南で葦名盛舜にめぐりあい、目的を変更し会津に住むことになった。やがて葦名盛氏の時代に、糟尾宗頤は名医の実績を買われ典医になりさらに天正 9 年(1581) ごろ葦名盛隆の仲介と織田信長の推挙で医師最高の位階である法眼を得ることができる。盛隆は当時信長に接近し、名馬 3 頭、蠟燭 1000 挺を贈るなどして積極的な外交を展開していた。

一方、下野国糟尾村(栃木県鹿沼市粕尾)には、戦国時代に「録事法眼」という医師が住み医業を営んでいた。そして何人かの弟子もいた。この法眼は死後録事尊(ろくじそん)として祀られ神仏化される。

医師糟尾宗印・宗頤が奥州会津へ移り住む過程には、戦国時代のドラマチックな出来事があったためである。そこで当時の武将たちと医者との関係をからませ説明していきたい。

### (2) 糟尾宗頤の出自

糟尾宗印・宗頤の出自は、現在横浜市の糟尾早苗さんが所持する系図や古文書にくわしい。戦国時代から江戸時代初期の系図を見ると

糟尾氏始祖①政長——②宗心——③宗ト——④幽栖法印——⑤宗印——  
⑥好徳——⑦好意——⑧宗頤——⑨宗波——⑩盧庵——⑪玄的——⑫玄要——  
⑬盧庵(2代目)——⑭琲伴——以下続く

この系図は親子兄弟が重複して書かれた部分が見受けられるが、5代目宗印のころの天文 21 年(1552) 糟尾宗印・宗頤(父子か)は下野国から会津に移り住み、葦名盛舜に召し抱えられる。糟尾氏は盛舜・盛氏・盛隆・義広へと葦名家代々の主君に仕えたが、葦名義広が伊達氏と摺上原の合戦で敗れ国を失った天正 17 年(1589) ごろ系図では宗頤の孫⑩盧庵の時代となる。盧庵は当時の政情から主君葦名氏を失うが、まもなく蒲生秀行に仕えたと系図に見える。糟尾家はその後近世まで医家として名声を残し会津の地域医療につとめてきたようだ。

糟尾宗頤は、当初黒川に住み、次に会津本郷宗頤町に土地を与えられて移り、その後時代の流れで転居したようだ。累代の墓は会津坂下町光明寺にあり、宗頤から数え 6 代目の琲伴という医師の墓碑が確認できるという

医師糟尾氏の累代は『会津旧事雑考』向井吉重編・寛文 12 年(1672) 刊に掲載され、この系図は横浜糟尾氏系図と同一である。また『会津鑑』高岑慶忠撰・

寛政元年(1789)刊にも掲載され、事績や系図は同一のことが述べられている。

糟尾宗頤の事績は『会津本郷町史』や『北会津村誌』などに述べられている。現在会津で糟尾姓を名乗る家は数少ないと思料するが、傍系は歴史的に見て散在していると考えられる。

上記の横浜糟尾氏は、近世まで会津高田町に住んでおり、糟尾姓を名乗り先祖の家系を守ってきたが、戦後糟尾早苗さんの結婚の事情により横浜市へ転居されたという。

### (3) 会津糟尾家に光が当てられたいきさつ

前述の栃木県鹿沼市下粕尾(下野国糟尾)の録事法眼と、戦国時代の医家糟尾氏との歴史的関連を述べたのが、東洋大学大島建彦教授の「家の説話と村の説話」(説話文学研究第19号・昭和59年)である。この論文を契機に会津の糟尾氏の存在がわかり、平成7年に天下井恵『粕尾氏系譜』(私家版)が発表され、糟尾氏の研究が大きく前進した。さらに小著『名医ろくじ法眼』平成27年刊により糟尾氏の研究を深めることができた。

録事尊の信仰は、江戸時代中期からはじまり、雷除け・水害除け・家内安全が有名で、下野国粕尾村を中心に上州の一部から武州の一部にまで信仰圏が及んだ時代があった。録事尊は毎年2月11日が例祭である。また、全国でも珍しい「仏さまの村まわり」ともいわれる録事尊の巡行仏が厨子に納められ、旧粕尾村各戸を廻っている。この民俗風習は現代においても行われている。

さらには、録事法眼の伝記「粕尾録事尊縁起」において、その縁起末尾の文中に3人の医弟子がいたと記されている。医弟子のうち、1人は奥州の糟尾宗印(または宗頤か)、もう1人は武州八幡山の黒沢伊予(のちの糟尾養信齋)であることが文献から判明できる。残る1人は下野国星野の人とされるがくわしいことは不明である。

会津の糟尾宗頤は、医師として顕著な足跡を残した人物であるが、その生き様がわかってきたのはまだ近年のことである。

### (4) 糟尾氏が会津へ移住した理由

糟尾氏が下野国糟尾を去り会津へ移った理由は、戦国時代の争乱から生じたもので、当時の関東管領上杉憲政の出奔によるものである。

天文年間、山内上杉家の当主関東管領上杉憲政は、扇谷上杉家ともども関東で君臨していたが、小田原の後北条氏が北上して関東を制覇しようと勢力を伸ばし、両者は敵対していた。天文15年(1546)史上有名な河越夜戦において、上

杉憲政・上杉朝定、足利晴氏連合軍は河越城を取り囲み、有利な戦況であったが、北条勢の策略と奇襲にあい連合軍は敗北する。朝定は討死、憲政は命からがら上州平井城に退く。その後も北条氏の圧迫が続き、この平井城も捨てざるを得なくなり、天文21年(1552)越後の長尾景虎をたより落ち延びて行く。そして関東管領の職と上杉姓を長尾景虎に譲る。この時点で関東管領の職は長尾景虎が継ぎ、名を上杉謙信と改める。憲政は越後の御館という所に住む。

上記の上杉憲政が出奔のとき、下野国粕尾の医師糟尾宗印も憲政の臣下だったのであろうか、越後行きに従うことになる。そして下野国粕尾から会津西街道を経て越後を目指す、その途中の会津伊南において葦名氏の誘いを受ける。葦名氏は糟尾氏の医師の実力を認め誘ったのであろう。糟尾氏は人生の岐路に立ち、ここで敗軍の将憲政に随行することに見切りをつける。理由を病氣とし、越後行を断念する。当時の天下の政情を考えれば、ここで落ち目の憲政と決別する方が、糟尾氏にとって有利と判断したのであろうか。

医師糟尾氏と葦名公との結び付きは、この時点から始まる。

#### (5) 盛氏と画僧雪村・医師宗頤との邂逅

ここで葦名盛氏の人物像にふれてみたい。天文15年(1546)、盛氏は画僧雪村とめぐりあう。当時盛氏25歳、雪村43歳位のところである。雪村は常陸の部垂の出身で、天文17年(1548)ころまで会津に居たが、のち会津をはなれ、絵の修業のため小田原・鎌倉方面に移る。下野国鹿沼の今宮神社にも足をとどめ馬の絵を奉納している。晩年は奥州田村(三春)に隠棲する。雪村はたくさんの絵を残したが、そのうち「風涛図」という水墨画は国重要文化財に指定されている。

雪村が会津を去ったあと、天文21年(1552)糟尾氏が下野国からやって来る。理由は上杉憲政の出奔と関係し、前述のとおりである。

盛氏は「止々斎」と称する雅号をもっており、このことは何かの芸事に通じていたのであろう。文武両道に秀でた盛氏は、奥羽の守護大名として君臨する立場でもあった。

宗頤は、盛氏から医師としての技量を高く評価され、特別に厚遇されたようだ。一方、盛氏は会津に来る文人墨客、医師、画僧、商人などから諸国の情報を手に入れ、有為な人材を召し抱えたのである。そのころ、盛氏は永録4年(1561)から9年の歳月をかけ向羽黒山城の築城を完成させ、黒川城より移る。のち盛興の夭折により黒川に戻り政務に当たる。盛氏は天正8年(1580)60歳で没する。死因がわからないが、当時としての平均的寿命といえよう。

宗頤が盛氏から土地山林をたまわった元龜元年(1570)のころ、典医は向羽黒山城近辺に住むとともに、この地の村人たちの病気治療にも当たり「郷村の御家長の御仁医様」と称され、地域の指導者として信頼を得る。宗頤は天正14年

(1586) 没したと会津本郷の旧家栗城氏の古文書に記されている。死後「宗頤町」という地名も残した宗頤は、その実在と足跡をしっかりと刻みこんでいる。

### (6) 糟尾宗頤の医師としての系列

戦国時代の医学は漢方医学である。奈良平安時代から鎌倉時代にかけて漢方医学は中国大陸から渡来した医書を原典とし、日本の医師たちは、この漢方の医術を金科玉条とする時代があった。漢方医学も時代とともに進歩し、だんだん日本の風土に合う医術に改良されてきた。当時の日本には、医師を養成する制度も機関もなく、医師になる人は僧からの出身が多かった。難解な医書を読むことができる学識が必要であり、著名な医師に師事し、医学・薬学を学びかつ臨床的な経験を重ね、さらには遊学と称して諸国の名医をたずね教えを乞う努力もしてきた。

こうした漢方医の成り立ちの中で、中世末から戦国時代末にかけ傑出した名医として田代三喜があげられる。この人は武州越生の産で、明国で医学を学び、帰国して古河を中心に活躍した人物である。有名な弟子に曲直瀬道三がいる。ある書物にはこの二人は会津の柳津で師弟の契りを結んだとある。

糟尾宗頤の医師としての系列は板坂法印の名が横浜糟尾家の古文書と系図に見える。板坂法印は武田信玄の典医であった。当時の名だたる大名たちは名医を求めて召し抱えている。病気は四百四病といわれ、多様な病気があったであろうが、現代とは比較にならない劣悪な生活環境の下で庶民は生活していた。人生五十年は当たり前のことで、人々の医学的知識も低い時代であった。

医師の数が少なく、庶民が医者の治療を受けられるようになったのは江戸時代も中期以降であろうか。会津藩は全国に先駆け17世紀中ごろ(江戸時代初期)医師養成の学問所(藩校日新館の前身、郭内講所と稽古館)があり医師養成をした。さらに享和3年(1803)には会津藩校日新館が建てられ、その中に医学寮を設けて医師養成を行う部門を設けている。一方、顕著な実績があった町医も顕彰する制度があった。こうした医学に対する理解認識は、会津は全国にさきがけており、特筆すべきことである。

### (7) 生きている二つの伝承

次に述べる二つの伝承は、糟尾宗頤の足跡を示す貴重な史実で興味深い。

天和3年(1683)会津地方に大洪水があった。そのとき各地で洪水被害が発生し、本郷の宗頤町に所在する玉光堂も流出、堂の中の糟尾宗頤守り本尊地藏菩薩像が流されてしまった。幸い下流の農民がこれを発見し奇跡的に拾われ民家にしばらく安置された。その後何年か経過し、この地藏菩薩像は篤志者の計らいにより正徳元年(1711)泉現寺客殿に安置され、安永9年(1780)泉現寺境内

に往古の玉光堂を再建、地蔵菩薩像も安置したという。この伝承は旧会津本郷町と旧北会津村の郷土史に記述されており、大洪水被害の一コマが思わぬ形で糟尾宗頤のことを述べている。

もう一つの伝承は、雷神の話である。

『会津本郷昔話』平成4年刊では「糟尾宗頤のルリ色の壺」という民話を紹介している。この原典は『会津旧事雑考』の中で述べている糟尾氏の由緒から引用したもので、雷神が糟尾氏に対し医書「龍起方」と大黒像を賜ったとある。民話の中で述べている情景は、黒雲が湧き雷鳴すさまじい天空のとき、医師糟尾宗頤がルリ色の壺から医薬を取り出し、神にささげて祈ると、雷神の化身となった童子が現れ、医書と大黒像を授ける話である。この医書と大黒像は糟尾家の子孫玄的が秘蔵しているという。

この雷神が授与したという医書と似たような民話が、下野国粕尾の粕尾録事尊縁起にも書かれている。下野国粕尾では、録事法眼が雷神の病気を治したお礼に「龍起雷論」という医書を授与され、加えて雷神の計らいにより、大雨を降らせ粕尾川の川道を整える民話となっている。注目は「龍起」という医書名である。会津と下野粕尾とも同じ医書名であることは雷神伝説の根拠が医家糟尾氏から出ていると考えられる。ここに会津と下野国を結びつけたヒントが隠されている。

会津本郷の民話と下野粕尾の民話が同じようなストーリーであることは、雷神が授与した医書名でも一致し、下野国粕尾から会津に移住した糟尾氏が持ち込んだものと推察される。

中世のころ、人々は、雷神の存在を信じていた。雷は雨をもたらす恩恵とともに、時には落雷により勸善懲惡的被害をもたらすこともある。中世は現代人とは違う特別な雷神信仰があり、雷は医者や医書とも関係をもつ特別な存在であったことを理解すべきであろう。

#### (8) 医弟子の伝承と法眼医師の文献

「粕尾録事尊縁起」によれば録事法眼には三人の医弟子がいたと書かれている。この医弟子たちが史料の中に現れ、裏付けられ実在がわかったのは最近のことである。このうち、会津の糟尾宗頤と武州の黒沢伊予（のち糟尾養信齋）の2人は下記文献史料から確認できる。

また、下野国粕尾には戦国時代糟尾法眼（糟尾寿信齋）を名乗る医師が居て医弟子たちに医術を教えていたことが『新編武蔵風土記稿』『武州文書』に記されている。

以下、本稿で引用した文献・史料は下記のとおり。

1 『会津旧事雑考』一前述のとおり。

『会津鑑』——会津旧事雑考とほぼ同じ。

「横浜糟尾系図」「同 古文書」前述のとおり。

戦国時代は葦名家に仕え、近世においては会津の爲政者に取り立てられ、近世まで会津の医家として存在する。横浜糟尾家の古文書解説により、さらに解明が前進する余地がある。

## 2 『新編武蔵風土記稿』・『武州文書』

上記二つの文献は、八代将軍吉宗のころまとめられた史料集で、この中に武州金屋村の黒沢伊予という人物が天文年間(1532-1554)野州粕尾の糟尾寿信齋法眼のもとに来て医術修業し、のち帰国する。伊予は師の家名糟尾を継ぎ、糟尾養信齋と称し地域の医師とし活躍する。その後、後北条氏滅亡後は武州八幡山金屋村に土着し、地域の医家となった記録が見える。(旧家者糟尾衛次文書)。

3 「粕尾録事尊縁起」——栃木県鹿沼市下粕尾の常楽寺に伝わる文書。

4 「栗城家系譜」——宗願町の旧家栗城家に残されている古文書。

5 栗野古記録——(鹿沼市栗野の旧家にあった古文書)

### (9) むすび・横浜糟尾家の史料から

横浜市に住む糟尾家(糟尾早苗氏)には医家の史料・系譜・古文書が残されており、こればかりはなおさず郷土史の一端を示すものである。ここでその一部を紹介し参考に供する。

- (1) 盧庵(初代)が元和2年(1616)に記した「万病円之方」という漢方薬の調合方法が書かれている。武州江戸宗哲法印相伝也とある。
- (2) 糟尾盧庵(2代目)が貞享3年(1686)に療治した病人の病証(カルテ)があり、糟尾琲伴の祖父盧庵の筆跡と注釈がある。病人カルテは長十郎、平兵衛、九郎兵衛妻、伝右衛門、十三郎、武兵衛、八兵衛、利兵衛、十兵衛妻など9人の村民で、病気の症状や治療薬が書かれており当時の医療の実態を知ることができる。
- (3) 糟尾玄的あての手紙  
玄的は初代盧庵の子で(盧庵は襲名で初代・2代・3代と3人が名乗り、著名な名として使われている)坂下村の西田宗城という人物と当時交際していた文書がある。
- (4) 「会津屋形盛氏様 諡名 六月十七日死日 行年六十歳」 筆者不明の書跡がある。主君追悼のメモか。
- (5) 各種の古文書。